
IS × イリヤの空、UFOの夏

サキサカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS×イリヤの空、UFOの夏

【Nコード】

N9861U

【作者名】

サキサカ

【あらすじ】

このお話は、作者が超すごいオナニーを見せつけようと頑張るものです。オリ主最強系になると思いますので、お読みの際はご注意ください。注）イリヤの空、UFOの夏とのクロス物ですが、加奈ちゃんも床屋の息子も無駄にハイスペックな部長も出てきません。

0, beginning of the end. (前書)

10年前。

o , b e g i n n i n g o f t h e e n d .

まぎー 血が抜けていく。命が、熱が、自分の体からゆるゆると抜けていくのが良く判る。

ああ、ぬ。

まぶたに焼けつくほどの実感を伴って呟く俺を、彼女はただ沈黙を以って見つめていた。

肩までの黒髪。ノンフレームの眼鏡。あまり上背のない、肉の薄い身体。その辺の量販店で買ったと思しき、印象に残りにくい服。その眼には僅かばかりの申し訳なさと、ほんの少しの倦怠さと、確かな 安堵だろうか？ 愉悦、ではない。しかし歓喜のようでもある。とにかく確かな 緩やかな、笑みが浮かんでいた。

「ごめんなさい、というべきかな」

薄く上がっていた口角を引き締めて彼女が言う。そうやって真面目な顔を見ると、こちらが照れてしまう事を知っているのだ。

思っいてもいない癖に。

だから、思わず憎まれ口を叩いてしまう。口でかなわない事など判り切っていると言うのに。

「いいえ。本心だよ。……まあ、ほんのちよつとは」

相も変わらず、真面目な表情で彼女は話を続ける。だからその顔をやめると言うのに。照れ臭くてしょうが無い。思わず目を反らしたくなる。それでも、俺は反らさずじっと見つめているのだけれど。

これが最期なのだから。

「……××××君が私を好きだったのは知ってる。知ってた。だから、ごめん」

ああ、やはり気付いていたのか。それもそうだ。別段何が何でも隠し通そうとしていたわけでもなし。という事は、この謝罪は俺を*した事に対してでなく、俺をふる事に対してか。このような場面で。二人きりなのに。

苦笑が漏れる、つもりだったが、頬肉はひきつったように震えるだけだった。

「何も無ければ、私も××××君を受け入れたかもしれない。そして愛を育んで、結婚して、子供を産んで、歳を取って、一緒にお爺ちゃんとお婆ちゃんになったかもしれない。でも」

だがその『何』はあった。だからこうなっている。最早、何を言っても今更だ。

それにどちらにせよ構わないのだ。もともと彼女とどうこうなるうとは思っていなかった。自分は彼女に寄りかかっていらればよかったのだから。ただ、

過去形には、しないで貰いたいな。

「…………… 本当に、なんて言うか。今更だけど、ちょっと後悔してるかも。私みたいなのが結婚できる相手なんて、×××××君くらいしかないだろうし」

最高の褒美だ。惚れた女の手で。ねて、最期にこんな言葉を貰う。結局、俺も彼女も似ているのだ。どこか精神が歪で、人に擬態しなければ社会では生きていけない。意義を他人にゆだねたがる性質の俺は彼女に一切を預け、価値を自らに取り入れたがる性質の彼女は目につく端から同化を行い、ついに『薄い』他人では満足しきれずに俺に手を出した。

彼女は俺を吸収しこれまでにない充足を得るだろう。そして満ちた腹はやがて餓え、最早それを癒すすべは無いだろう。何故なら、唯一それを癒せるだろう俺は、ここで彼女に全てを与えるのだから。

「もうダメだね。今はすごく気持ちがいいけど、これは麻薬の気持ちよさだ。まるで自分が普通の人間のような気がしてくる。このまま、満ち足りて生きていけるような気がしてくる。そんなはずはないのにな」

目が見えなくなってきた。体がまるで氷になってしまった様に冷たい。臨死の恍惚に脳髓がとろける。この快楽は、彼女に与えて貰ったものだ。全てを奪われ、俺もまたかつてない程満ち足りている。

最期の瞬間が訪れる。

「まあ、すぐに私もそちらに　　かは、確実には言え　　が
いると、　　n　　て　　。　　」

ああ、終わりだ。

「　　愛している」

「ああ、終わった。終わっちゃった」

「あーあ。もつと我慢出来たらよかったのに。そうすれば、もつと気持ちよかったと思うのに」

「ま、終わった事は仕様が無いかな。……どのくらい持つだろう？
どちらにせよ、つかまって刑務所なんて入れられちゃったら××
××君のところに行くのに時間がかっちゃうし、最後は派手に
かないと」

「あーあ。カッコいい終わり方しちゃって。これで私達が普通だったら……そもそも出会ってないかも、か」

「向こうで待っていてくれるかな？ 別にあの世とか信じてるわけじゃないかったんだけど……そっか、こういう気持ちがあるから人はそういうの考え付くのか」

「あーあ。後はホント、ロスタイムだよねえ。あ、今日のご飯どうしょ。××××君いないし、自分で作るしか……いいや、おべんと買って帰ろ」

「××××君のご飯おいしんだよね。しいたけだけはやめてっていくら言っても聞いてくれないけど」

「あーあ。これからしばらく掃除も洗濯も自分でやらなきゃかあ」

「あーあ」

「あーあ」

スーツの男がその喫煙所にその時間に訪れたのは、山のように吸殻が積まれた汚れた灰皿を掃除するためでは当然なく、切れたニコチンを補充するためだった。

ポケットから半分潰れた煙草の箱を取り出し、一本啜えてオイルが3ミリしか残っていない100円ライターをする。が、つかない。小さく一つ舌打ちし、二度、三度とライターをするがまだつかない。

ただでさえニコチンの欠乏により苛立ちやすい状態にあった男はひととき大きな舌打ちを二度繰り返した。喫煙所に入ってきた作業着姿の小男を見てぴたりと動きを止めた。

小男は灰皿には目も向けずスーツの男に近づき、顔を寄せ小声で何事か話しかける。男はピクリと方眉を動かし、加えていた煙草を億劫そうに箱に戻し、石のすり減ったライターを小男の胸ポケットにねじ込んで喫煙所を出ていく。

当然、作業着の小男もその後続いた。

「例の研究所から、子供が一人保護されたそうです」

<
< 0
, b e g i n n i n g
o f t h e e n d .

o'beginning of the end. (後書き)

話題の直訳は「終わりの始まり」

1 / Also sprach Zarathustra・(前書き)

かの超人は、かくのごとく嘆いたのである。

1 / Also sprach Zarathustra .

織斑一夏は参っていた。

一夏は自分を鈍感な人間だとは思っていなかった。稼ぎに出る姉に変わり、幼いころから家事をこなし家を守ってきた自分は、それなりに気を使える人間だと思っている。

しかし、同時に繊細な人間だとも思っていなかった。一日の家事となると多くの人が思うよりも重労働だ。たかが10幾つにもならない子供が完璧にこなせるものではない。そのため必然的に“上手い”手の抜き方を覚える必要があったし、そういう“生活の知恵”をご近所の小母さま方の止まらない口から教われれば、それはもう遅くなるものである。一夏は、最大で5人の小母さま方の井戸端会議に参加し、その日の夕飯から翌朝の朝食のメニューまで聞き出す事が出来る。もちろん全員分の、だ。

そしてそんな百戦錬磨の織斑一夏をして、なおこの状況は辟易せざるを得なかった。

（甘かった……！ これは、想像以上に、きつい……！）

IS学園一年一組。総勢31人中、実に29組の視線が物理的な圧力を錯覚させるほどの密度で持って、一夏の背を燃烧させんとしていた。

もちろん一夏として理由は判っている。ISは前提として女性しか

作動させることが出来ない為、必然的にIS学園に男子生徒はいない。それだけでなく昨今の女尊男卑の風潮の為か、職員はもちろん出入りの業者に至るまで女性ばかり。いっそ偏執的と言えるほどに男の影が無いのである。

つまり、珍しいのだ。同種でありながら異なる性質を持つと書く、異性と言う奴が。

（だからって、きついもんはきついんだけどな……！）

頭では理解していても、一夏の体はストレスに正直だった。うなじの辺りでは産毛がぞわぞわしているし、脇の下には冷たい汗が流れているを感じている。先ほどから握りしめた両手を机の上に置き、顔をうつむかせて耐えているが、それも何時まで持つか一夏自身にも判然としなかった。

半ば死に体の目線が、窓際の席へ向く。

篠ノ乃箒。かつての幼馴染。

実はこの時点で、織斑一夏は彼女が昔同じ釜の飯を喰った同門であると確信している訳ではない。しかし、確かに見覚えのある横顔と、ありし日と同じ髪型を見て恐らく自分の知る剣道少女だと考え

ていた。そして、そうであるなら自分の状況を見て、助けてくれるのではないかと。具体的に、どうすれば彼女が自分を助ける事が出来るのかは頭になかったが。

目が合った。

反らされた。

薄情者！ と声をあげなかった自分は偉いのではないだろうかと一夏は現実逃避を試みた。結局状況に負けて声を出す勇気が無かっただけであると思いなおした。

だがまだだ、まだ終わっていない。頼るべき人間はもう一人いる。

先ほどとは逆に視線を投げる。教室の右端、廊下側の前から3列目。身の丈6尺を優に超す大男が窮屈そうに座っている。机の上に置かれた両手は熊手のようで、僅かにのぞく上履きはアイロンかと思うほどだ。えらの張った顎に面長の顔は、隣の女子と比べて1、5倍は大きく見える。その顔に並ぶのはへの字にぐいと引き結ばれた大きな口に、少し上を向いた鼻、やたら小さいくせに妙に瞳が大きい為にほとんど黒一色の両目と、まるでデフォルメされたアンコウのような造作をしている。さらに左頬には目の下から始まって耳の下へ抜ける大きな傷跡があり、とてもではないが堅気には見えない。髪型も丸坊主一步手前の刈り上げだ。

見るからに恐ろしい外見だが、最早一夏にそのような事を気にする余裕はなかった。逆に、その凶相を頼もしくすら感じるほどだ。一夏は少しストレスでアレになっていた。

公式に発表された“二人目”のIS適正を保有する男性。

名を、塚本義時つかもとよじときと言う。

織斑一夏が“一人目”として発見されたと情報が走った時、正しく世界は震撼した。

ISが軍事兵器として運用される際に立ちはだかる絶対的で致命的な欠陥の一つ、“女性にしか起動できない”。それを除去できるかもしれない可能性。

ISは強大だが、それを使う女性が強靱なわけではない。女性全

般の平均より男性のそれの方が骨格は頑健で、膂力も優れ、タフネスで、空間把握能力も繊細だ。もちろん女性にも優れた点はある。痛みに強いし、生存能力も男性に勝る。何よりある一線を越えた女性には恐ろしいほどに肝が据わっている。しかしそれでも、総合的に鑑みて、事戦闘における限り男性優位は間違いないのだ。

各国は色めき立ち、数日も待たずに特別予算を組み、自国の戸籍にある男性ほぼ全員にIS適正検査を施行した。

塚本はその検査の初期段階で、日本において発見された適正保有者である。塚本が発見された時、国際IS委員会はまだ織斑一夏の対応を協議している最中であつた。喧々諤々とする会議のただなかに飛び込んだ“二人目”の報告に、委員会はまるで時が止まったかのように沈黙したと言う。

それから半日を置かず、織斑一夏、塚本義時の二人をIS学園へ送る事が委員会の総意として決定される。表向きは今後多くの危険にさらされると予想される二人の保護。裏向きには日本に二人も確保されない為の隔離。そしてこれから現れるであろう三人目以降も同じようにIS学園に送るよう規定された。

もちろん、三人目の発表は無かつた。

多くの人々はテレビで得た二人の情報を交換しあい、一部見当違いの自称有識者達は開発者が日本人である事からか、「日本人である事が関係しているのでないか」と声高に主張した。そして目端の

利く者は国が困い込みに走っている事を理解していた。

当然だ。折角判り易く直接国益につながる人材を、何が悲しくて自分の手元から三年も離さなければならぬのか。IS学園でなければISの操縦を学べない訳ではないのだ。教えられる人材等、多くの国にはいくらでもいる。もちろん、教導役には厳選に厳選が重ねられるだろうが。

それら事情を知る人間は日本に同情した。折角の金の卵を、不用心に発表などしてしまっただがために奪われた哀れで間抜けな国だと。実際、頭を抱えた政治屋は多かった。

そして塚本義時にとって、そのようなことは総じて瑣末であった。

視界の隅でさっきから織斑一夏がちらちらとこちらに視線を投げてくるが、塚本にもどうしようもない為無視していた。恐らく教室中の視線を一身に集めている自身の状況をどうにかして欲しいのだろうが、今からどうこうしてやるには時間がない。こちらがアクションを起こす気が無いのが判ったのか、織斑は絶望を顔で表現し、再び机と目と目を合わせて見つめあう仕事に戻った。背中に大きく“神は死んだ”と描いてある。気がする。

同情するが、だからと言ってどうしようもない。時間は過ぎていくため、すぐにでも担当の教員が来るだろうから、直接そばに行つて話しかけてやるわけにもいかない。そもそも、入学初日だ。あまり大きく動くつもりはなかったし、それは教室の全ての人間がそうだろう。

前方の扉が開く音。

「皆さん入学おめでとう。私は、副担任の山田真耶です」

入ってきた女性　山田教諭の言葉に、誰一人として返事をしなかった。織斑一夏は机との熱い逢瀬に夢中で気が付いていないし、塚本は特に反応を返す必要を感じなかった為であり、その他の生徒に関しては、「うるせえ今忙しいんだ」状態である。

その後も山田教諭はめげずに話を続けるが、依然として反応は無い。これ以上は無駄だと思ったのか、早々に自己紹介に移ることにしたようだった。

「じ、じゃあ自己紹介をお願いします。ええっと、出席番号順で……」

流石に無視しきれなかったようで、順番に自己紹介が始まった。出席番号は、まず日本人生徒を日本語五十音順、次にアルファベット仕様語圏の生徒を国家に係わらずアルファベット順、その他の言語圏の生徒は入学生徒の多い言語グループから順に表音言語圏の者は発音表順、表意言語圏の者は発音記号の言語学的順序をもとにしている。

『あ』の生徒から始まった自己紹介だが、机と愛を囁き合っていた『お』り斑で一時停止を余儀なくされた。

「……り斑君？ 織斑君。 織斑君！」

「え、あ、あ！ はい！ ってえ！！」

呼ばれている事に気付いた織斑一夏が慌てて立ちあがり、勢いよく膝をぶつけて身もだえる。大丈夫ですかっ！？ と慌てる山田教諭に手で返事をするが、どう見ても涙目になっていた。

「あー、織斑一夏、です」

沈黙。

女生徒全員からの「もっと喋れ」という目線での圧力。哀れなほどにうろたえる織斑一夏。

せめて「よろしく」の一言でも充分だっただろうに、やはり織斑一夏はまいていた。

「……っ、以上です」

それは彼の精一杯だったのだらう。先ほどからクラス中の視線にさらされ、孤立無援の孤独を知り、ぶつけた膝はじくじくと痛む。

ぶつけた時に聞こえた笑い声は、聞き間違いではないだろう。織斑一夏はノリよく椅子を倒してまでコケてくれた女生徒達に感謝する余裕もなかった。織斑一夏はスベツた事を理解したが、挽回できるほどの余力は無かったのだ。

しかし、そこに救いの手が現れる。

「……貴様は自己紹介もまともにできんのか」

「……千冬姉え？」

振り下ろされる出席簿。

「織斑先生だ。公私は分けるように」

土の付いた事のない女。最初のブリュンヒルデ。刃金の乙女。織斑一夏にとっては無二の姉。そして何より“人類最強”。

織斑千冬がそこにいた。

その後、自己紹介はつつがなく終わり、最初の授業を前に5分の休憩を言い渡し、織斑教諭と山田教諭は教室から出て行った。

教室は女生徒達の話声で満たされる、かと思いきや、不気味な静けさを保っていた。そこかしこで囁き声での会話はあるが、誰も大きく動こうとはしない。

織斑一夏はいつそ自分から動こうかとも考えた。一夏自身、二人目の適合者には興味があつたのだ。それに彼 塚本義時はこの学園で唯一自分の味方である。少なくとも、性別的な意味で。

「少しいいか」

「え？」

機先を制された、と一夏は思った。しかしそれも一夏にとっては悪くなかった。塚本と話す機会はすぐに訪れるだろうし、針のむしろに座らされるようなこの状況を動かせるなら願ってもいい事だったのだから。

「箒か！　なんだやっぱりそうじゃないか！　久しぶりだな！」

一夏はこれ幸いとまくし立てる。周囲からの視線が強くなったが、それ以上に会話がある事がうれしかった。

「……………話がしたい」

「ああ、判った。そうだな、屋上でいいか？」

一夏の問いかけに篠ノ乃箒は言葉少なげに肯いて返し、二人は連れ立って教室を出る。教室中どころか廊下にたむろしていた他クラスの女生徒も連れ立っていく二人に注目する中、塚本は我関せずと教科書を用意し、余った時間で端末に教室に仕掛けられた週音マイクと監視カメラ、隠しカメラの位置を登録していた。仕掛けたのは恐らくE.S.学園だと考えられるが、これではまるで“盗”聴器だな、と顎をこする。いずれにせよ問題となる発言をしなければいいのだし、むしろ失態を装って意図した情報を伝える事も出来るだろう。塚本はちらりと教壇の上の監視カメラを一瞥し、端末をスタンバイモードに移行し胸ポケットに滑り込ませた。

一夏がいなくなったからか、教室と廊下の女生徒の視線が塚本に集中する。しかしその視線には一夏に向けられる様な好意と艶の含まれたものは少なく、たんに珍しいものに対する興味と、若干の醜いものに向けられる嫌悪、未知に対する怯えの色が感じられた。

そこに織斑一夏と篠ノ乃箒、出歯亀連中が戻ってくる。

チャイムが鳴った。

最初の授業はISの基礎知識に関する物だった。基本的な構造と稼働の際のアルゴリズム。使われている理論とシステムの概論。運用の際の注意点。どれも少し興味を持って調べればどこにでも転がっている情報だ。初日であることもあってか、中身などあってないような授業である。

しかし織斑一夏にとってはそうではなかった。板書は取っているようだが、授業開始から5分も待たずに挙動不審になっていた。ノートを取り、窓際の篠ノ乃箒に視線を投げ、消しゴムを取り落とし、時計を見上げ、黒板を端から端まで眺め、シャーペンシルに芯を詰めようとしてばらまき、篠ノ乃箒に救援信号を送る。電波状況が悪かった。織斑一夏の脳内で誰もが聞いた事のある合成音声が再生される。おかけになったでんわは、げんざいでんげんがはいっていないか、でんぱのとどかないばしょにあります。ピーっというはっしんおんのあとに、

「じゃあここまでで質問はありませんか？ 織斑君と塚本さんは大丈夫ですか？」

半ば目が虚ろになっていた織斑一夏はびくりと現実に戻還し、冷や汗をにじませ目だけで周囲を見渡した。どうやら誰も質問に手はあげないらしい。直接名を呼ばれたもう一人、塚本義時と言うと。

「いえ、ありません」

顔色一つ変えず、実に簡潔に答えていた。この時の一夏の心境はまるで竹馬の友に裏切られたかのようなだった。なんで判るんだ。お前も俺と同じのはずなのに！

「そうですか。織斑君はどうです？ 質問があつたら何でもきいてくださいね？ なんだって私は、先生なのですから」

そう言つて得意げにその大きな胸を張る山田教諭に、一夏は正直に答えるべきか悩んだ。この下手をすれば同年代にすら見える教師に、こんな事実を突き付けては傷つくのではないか？ それに自分もいささか恥ずかしい。だが見栄なぞ張ってもいい事等何も無い。後々困るのは何より自分で、そうなれば教師にかける迷惑も大きくなる。何より、一夏は正直な男だった。

「はい！ 山田先生！」

声を張り上げ、天に向かって手をあげる。

「はい！ 織斑君！」

頼られるのがうれしいのか、喜色を顔に浮かべて指名する。だが、その顔は織斑一夏の無情な一言により引き攣る事となる。

「授業のはじめから、ほとんど全部判りません！」

この授業中、織斑千冬の出席簿は一夏の頭に三度降り下ろされた。

<
<
1
,
Ä
l
s
o

s
p
r
a
c
h

Z
a
r
a
t
h
u
s
t
r
a
.

1 / A l s o s p r a c h Z a r a t h u s t r a ・ (後 書 き)

話題はフリードリヒ・ニーチェ著『ツアラトウストラはかく語りき』

作中で一夏が背中で語ったシーンより。

2 / London Bridge (is broken down) (前書)

賽は投げられた。出目は二ゴロの半。

散々な目にあつた。

織斑一夏は自業自得な面がある事を認めつつ、そう思わざるを得なかった。机の上に目を落とせば電話帳か、はたまた広辞苑かと疑わんばかりの分厚いテキスト。確かに、ろくに確認もせず捨ててしまった自分が悪いのだろうが、これを全部暗記、期限は一週間。如何に敬愛する姉の命令だとして、無理なもんは無理である。人間の頭は簡単にコピー&ペーストで容量を増やせるわけではないのだ。

だがここで、「出来る限りはやってみるけど」と考える辺りが、一夏が調教済みであることを如実に示していた。基本的に、姉に逆らえない男である。

「よう。大丈夫か？ 織斑」

声を掛けられ、織斑一夏は顔をあげた。一夏が学園に来てから、彼に声をかけたのは二人の教員と幼馴染の三人のみ。しかしこの時一夏に投げられた声は、腹に響く重厚なバリトンだった。

一夏はとなりに来ていた塚本義時に並々ならぬ安堵を感じていた。やはり、男同士だと女の子を相手にするより気が楽だ。

「ああ、まあ、何とかするよ。えっと、塚本、でいいんだよね？」

一夏は確認の意味を含めて聞いた。自己紹介の時は、姉の登場で動揺していたのか、クラスの半分も覚えられなかったのだ。塚本に關しては、自分を除くたった一人であるため、間違っではないと思っていたが。

「ああ。自己紹介でも言ったが、塚本だ。今は登戸研究所預かりになっている。二人だけの男なんだ。よろしく頼む」

そう言って右手を差し出す塚本に、一夏は自己紹介の時の彼を思い出していた。

『塚本義時だ。航空自衛隊園原基地所属だったが、今回の件で登戸研究所預かりのISテストとして登録される運びとなった。よろしく』

にこりともせず、淡々とそれだけ言っただけ座った塚本に、教室中の女生徒は何も言わなかった。一夏は自分の時はあれだけ無言の圧力をかけてきた癖に！と憤ったが、それも無理のない話だった。180センチを超える巨軀に、気の小さい女性なら見ただけで泣きだしかねない凶相、しかもそのうえ、軍属。IS操者となるべく英才教育を受けてきた彼女たちはまさしくエリートと呼ぶに相応しかったが、同時に15歳の少女でもあった。さらに普段街で見かける男性はどれもこれも情けの無い顔をした草食系ばかり。肉食どころか骨すらまとめて噛み砕きそうな塚本の異相は、彼女たちに二の足

を踏ませるに十分だった。

一夏は差し出された右手をしっかりと握って答えた。

「こつちこそ！ 俺もさつき言ったけど、織斑一夏だ。よろしくな！ 俺の事は一夏でいいから、こつちも義時って呼んでいいか？」

がつちりと握手をしながらそう返す一夏に、塚本は眦を下げ、僅かに笑った。それはせいぜい微笑と言うべきものだったが、それでも塚本の凶相が、いきなり愛嬌のある優しげな顔に見えるようになった事に一夏は驚いた。

「おいおい、そりや中学校のノリか？ 別にいいだろ、呼び方なんて適当で。女の子じゃあるまいに」

くつくつと笑いながら言う塚本に、一夏は不満を覚えた。一夏の持論では、呼び方は重要なのだ。親しい間柄であれば、それを示す為にも、自覚するためにも相応の呼び方をした方がいい。その方がより親しく、仲良くなれるのだ。故に、親しくなりたい相手には最初からそれなりの呼び方をし合う事で、早く仲良くなる事が出来る。大体、その強面から「女の子」なんて可愛い言葉が出てくると結構違和感がある。

それを聞いた塚本は、強面なのは俺のせいじゃねえよ、と笑いながら言った。同時に、判らんでもないが、と続ける。

「だがそれは女の子、じゃねえか。女性を口説くときのテクじゃないのか？ 男同士で名前呼び合って仲良しこよし、なんて、まあそう言うのもあるんだろうけどな」

そう言っただけで相変わらず愉快そうに笑う塚本に、一夏はひょっとして自分がおかしいのではないだろうかと思い始めた。そう言えば一夏のこれまでの交友関係は圧倒的に女性相手が多く、ごく自然にそちらに合わせた処世術を身につけていて、男同士の友情の結び方に拙かったのかもしれない。クラスメイトの男子に嫌われる事の多かった一夏は、これは自分が悪かったのだろうかと不安になった。実際はやたら女子生徒にモテる一夏に嫉妬していただけなのだが。

「ちょっと。よろしくて？」

五人目の声は、どこか気品を感じる可憐な物だった。振り向いた一夏の目に、ゆるくカールした豪華な金髪が映る。塚本より自分の方が相手に近かったために、一夏が返事をした。

「ん、ああ。なんだ？」

「まあ！ なんですよそのお返事は！ このわたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、相応の態度と言う物があるのではなくて？」

うわあ。

この時の一夏の正直な内心である。

ISは女性にしか使えない。世間一般において、その最も判り易い弊害がこれだ。

地球最大の単体軍事能力であるISを効率的に運用するためには、優れた操者が必要となり、より優れた操者を得る為には、より多くの候補に切磋琢磨を積ませる事が望ましい。そのための下地として女性優位の政策が多く施行され、それに冗長する女性が現れても「ブタもおだてりゃ」の精神で路線変更もせず、に押し進めた結果

彼女のように、アレなプライドを発現させてしまう子供が出来てしまった、と言う訳だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

面倒だ、と思いながらも、こびへつらってやり過ごす、など利口な真似が出来ない一夏である。これは間違いなく一夏の美点の一つであるのだが、この場合は金髪の女生徒の勢いに油を注ぐ結果となった。

「知らない！？ この、入学主席の、ブリテン代表候補生の、このセシリア・オルコットを！？」

「というか、さっきの自己紹介で言ってたろう。聞いてなかったのか？」

激昂するセシリアだけでなく、塚本にもたしなめられた一夏は分が悪そうに眦を下げて頭をかく。

「さっきの時間は千冬ねえの登場とか、出席簿とかのせいで半分くらい聞けてなかったんだよ。オルコットさんだっけ？ 悪かったな。聞いてなくて」

名前を覚えていなかったのは一夏の落ち度である。素直に謝った一夏に僅かながら溜飲が下がったのか、顔を赤くし、眉を怒らせていたセシリアも少しばかり落ち着きを取り戻した。

しかし一夏は、ああそれと、と前置きしてこう続けた。

「代表候補生って、何？」

教室を沈黙が支配した。

教室中の女生徒が目を丸くして一夏を見つめ（一夏と塚本が会話を始めた時から全員で聞き耳を立てていた）、セシリアも顔に「信じられせんわ！」と書いてある。唯一、塚本だけは右の眉をひよいと持ち上げただけであった。

言葉も出ないセシリアに代わって、塚本が口を開いた。

「代表候補生つてのは、書いて字の通り『モント・グロッソ国家代表』の候補として国家に所属するＩＳ操者の事だ。候補生の細かい内訳やランク分けはそれぞれの国家によって違うが、まあ総じて優秀なＩＳ操者と言えるな」

塚本の簡単な説明に一夏はなるほど、と肯いた。確かに、字面を考えればおのずと予想もつく。

「そう！　つまり、エリートなのですわ！」

我が意を得たり、とばかりに声を張り上げるセシリア。ノリノリである。

しかし、周りで静観する女生徒達にとっては気が気ではなかった。セシリアは一夏と塚本の会話に割り込む形でこの状況を作り出している。つまりセシリアが頬を上気させ腰に手を当て、いい気になってポーズを決めるその隣では肉食魚の顔をした大男が悠然と屹立しているのだ。今は特にどうと思っていけないようであるが、いざ塚本の逆鱗に触れてもしたらセシリアが一体どうなってしまうのか。

頭からバリバリ喰われる、という事は無いだろうが。

「本来なら、エリートであるわたくしのように選ばれた人間と同じクラスと言っただけでも幸運なのです！　そのあたり、しっかりと自

覚して頂けますかしら？」

「そうか。そいつはラッキーだ」

もっぴたすら面倒くさくなった一夏である。

「貴方、バカにしてい」「どちらかと言えば」

一夏の態度が気に入らないのか、顔を歪めて苦言を呈しようとするセシリアを、塚本が遮る。ムツとした表情で、塚本にきつい視線を向けるセシリアだったが

「どちらかと言えば、世界最強と名高い織斑教諭の担当クラスになった事の方が、幸運と呼ぶにふさわしいと思うがな」

会心の一撃であった。

次の授業では、織斑教諭が教壇に立った。

「この時間は実際にISで使用する武装について話す、が。その前にクラス代表を決める必要がある。クラス代表とは、まあクラス委員のようなものと考えていい。ただし、代表は再来週に行われるクラス対抗戦に出て貰わねばならん。対抗戦では実際にISを使用してモント・グロツソールで戦う。その辺りも加味して考えれば、代表には種々の雑用をこなせ、ある程度の実力もある者が好ましいが、まあこの時期の貴様らは皆どんぐりだ。特に条件は無いと思っ
ていい。誰でもいい、立候補か、推薦があれば手を挙げる」

織斑教諭が一息に言うと、衣擦れのような囁き声が教室を満たし

幾許もせず、一人の女生徒が勢いよく手を挙げた。

「はい！ 織斑君がいいと思います！」

一夏は初め、それが自分の事だとは思わなかった。へえ俺以外にも『織斑』なんて奴がいるのか。我ながら珍しい名字だと思ってるんだけど。それに『君』ってことは多分男だよな。学園に男は俺と義時（結局名前前で呼んでいる）しかいないはずだと言うのに、まさか三人目！？

んなわきゃねえのである。

「っ、俺っ！？」

思わず立ち上がって教室を見渡す一夏に、女生徒達は「そうそう」と肯いて見せた。冗談じゃない、そんな面倒な、どうして俺が！

「だって折角の男の子なんだし」

「そうそう。こう言うアドバンテージは積極的に使わないと！」

「頑張ってー」

口々に答える女生徒に、一夏はくらくらしてきた。なんだよ、結局面倒事押し付けてるだけじゃないのか？それに「男だから」というなら、自分だけではないだろうに。

そこまで考えて閃いた。

「先生！俺は義時を推薦します！」

これならどうだ！とドヤ顔で立ったまま手を挙げ宣言する一夏に、塚本は笑いを含んだ声色で話しかけた。

「無駄な抵抗はやめて諦めろ、織斑」

起死回生の妙案を当の塚本に「無駄」と切り捨てられ、流石の一夏もムツとして言い返す。

「無駄とはなんだよ。だいたい、男だからって理由なんだから義時でもいいだろ？」

ここまで言っているが、一夏はそこまで代表をやる事が嫌なわけではなかった。たとえこのまま押し切られても、「仕様が無い」と考えて結局はそこそこ身を入れてやっただろう。だが、男だからという理不尽な理由で押し付けられ、しかも唯一の仲間から「無駄」

と言われて多少ムキになっていた。

そしてそんな人のいい一夏だからこそ、次の塚本の言葉を即座に理解する事は出来なかった。

「オレよりお前の方が美形だ。だから、お前の方が相応しいだろう」

この発言に、女生徒達は誰とわず顔を見合わせた。最初に手を挙げた女生徒にしても、そこまで露骨な考えはなかっただろう。しかし一夏と塚本を見比べて、「一夏の方がカッコいいから」「一夏の名前を挙げたのだと指摘されて、はつきり違うと言い返す自信はなかった。

しかし、一夏としてはそんな理由で押し付けられたらたまらない。

「美形ってなんだよ。そんなの関係ないだろ？ 大体、俺だってそこまでイケメンってわけじゃないし」

教室中の女生徒が「嘘だっ！！」とは叫ばなかったが。

「外見の美醜も、持って生まれる力の一つだ。上に立つ人間の見た目が整っていれば、下の人間を扇動しやすい。そもそも、オレでなくお前が推薦されたってのが、実際の結果としてここにあるじゃないか」

塚本はそう言って薄い唇をゆがめるが、一夏にはどうも納得いかなかった。つまりクラスのリーダーの様な物なんだから、見た目がいい方がクラスの皆も気分がよかるうし、納得もしやすいだろう、とは、一夏は思えなかった。別段努力もしていない要素で、相応しいだの相応しくないだのと言われることに、一夏は子供らしい潔癖さで反発した。

しかしこれは同時に、ろくな努力もせずに彼のハイレベルな容姿が保たれていると言う事でもあるのだが。

「納得いきませんわ！」

感情から、さらに反論を続けようとする一夏であったが、それを遮って声をあげる女生徒が一人いた。

「そのような選出は認められませんわ！ 世界で二人だけであるからと言って、男がクラス代表だなんて、そんな屈辱をこのセシリア・オルコットに耐えろと言うおつもりですか！」

あまりの言いざまに一夏はカチンときたが、元々やりたくもなかった代表を代わってくれと言うなら是非もない。塚本とは後で話し合えばいいだろうと考え、一夏は黙って椅子に腰を下ろした。

セシリアの演説は止まらない。

「実力から言えば、ブリテンのジュニア筆頭候補生であるこのわたしは、クラス代表を務めるのは自明の理！ それを、珍しいから等と言う低俗な理由で極東の猿にされては堪ったものではありません！ わたくしは学園にIS技術の向上の為に来ているのであって、猿を相手にサーカスをするためではありませんわ！」

黙って聞いていた女生徒達も、これは流石にまずいのではないだろうかと思ひ始めた。幾人かの女生徒が一夏に目を向ければ、彼は不機嫌そうに眉間にしわを寄せてむっつりと黙りこんでいる。いや、彼女たちが気にしているのは一夏ではない。結局のところ女尊男卑の風潮に染まった彼女たちは、単に見た目がいいだけの少年が怒りをあらわにしたところで、大したことは無いと高をくくっていた。だが、少女たちが気にする彼は別だ。その巨体には、風潮ではどうしたって誤魔化せない圧倒的な暴力の気配があつたのだから。

しかしその件の彼 塚本は、ただ面白そうにセシリアと一夏を見比べるだけだった。

セシリアのパフォーマンスは終わらない。

「大体、このような文化的に遅れている島国に拘束されること自体、わたくしにとっては非常に不快な」

「イギリスの文化自慢ってなんだよ。まさか世界一と名高い料理の事じゃないだろうな？」

とうとう我慢出来なくなった一夏の皮肉を皮切りに、二人の視線が中空で火花を散らした。

「あなた。わたくしの祖国を侮辱しますの？」

先ほどまでヒステリックに声を張り上げていたとは思えない、ボリュームの抑えられた、いつそ静かとすら言える口調。

「どっちがだよ。それともイギリスでは、自分の事は棚に上げるのがマナーなのか？」

しかし、一夏はそのような事は気にせず皮肉で返した。黙って聞いていれば好き勝手言いやがって。彼も頭に血が上っていた。

もちろん、セシリアの脳内の血液量は一夏のそれを凌駕していたが。

傲然と顎を反らし、下目を使って一夏を見下し、セシリアは一言。

「決闘です」

「いいぜ。四の五の言つより判り易い」

「話はまとまったか、莫迦ども」

互いにガンを飛ばし合う二人の間に、織斑千冬のセリフが割り込んだ。

「では代表はその決闘の結果で決めるとしよう。日時は一週間後のこの時間。場所は、ふむ。山田先生」

「あ、はい！ ええっと……その時間なら、第3と第5が空いています」

「では第三アリーナで。いいな、織斑、オルコット、塚本」

「……自分もですか？」

テキパキと段取りを組む織斑千冬に、塚本が一言物申す。

「貴様も推薦されただろう。拒否は認めんぞ」

何も問題はあるまい、と言外に圧力をかけてくる織斑千冬に、塚本はそれは構いませんが、と前置きして続ける。

「ISが用意できません。授業で使うのは一月後からと聞いていたもので、現在は研究所で調整の最中のはずです」

そう言う塚本に、教室中がざわりと鳴動する。今の言葉が真実なら、塚本は専用機を所有していると言う事になる。しかし、流石と言うべきか織斑千冬は表情も変えず、一言で問い返した。

「間に合わんか」

「催促はしてみますが、間に合うかどうかの判断は出来かねます」

淡々と答える塚本に、織斑千冬は「目途がつくようなら報告しろ」と一声かけ、未だ立ったままメンチを斬り合う二人に向き直る。

「身の程という物を教えてあげますわ。Monkey」

「言ってる、金髪。そのよく回る口、後悔させてやる」

「いい加減に座れ莫迦ども！ 授業を始める！」

出席簿が二度風を切った。

own London Bridge is broken down

2 / London Bridge (is broken down) (後書)

サブタイトルはマザーグースより『ロンドン橋墜ちた』

思ったより進まない物です。でもこれ以上長くすると読む方もちょっと大変だろうし、何より更新速度が落ちてしまいそう。

3 It eats the rice of the same boiler

誰かと一緒にテーブルを囲んでさ。馬鹿な話をしながらワイワイや
ってご飯を食べるの。

3 / It eats the rice of the same boiler

織斑一夏は思う。

食事を取る時は、誰にも邪魔されず自由で、なんというか救われてなきゃあダメなんだ、と。ネタの引き出しの多い男である。世代も違っだろうに。

IS学園の食堂は広い。一つの学年におよそ150人、三学年で約450人に加え、各学年、各担当の教員、用務員までが全て一度に食事をとれるよう、最大で600人まで利用できるようになってる。世界中から生徒が集まるために選べるメニューも多く、そのどれもが非常に高いレベルで提供されている。購買方法は日本の高等学校としてはごく普通の食券方式だ。

そんな食堂に、一夏は篠ノ乃箒、塚本義時と連れだって昼食に来ていた。一夏が箒を誘った時には「次は自分が！」と鼻息を荒くしていた女生徒達だが、次いで塚本に声が掛けられるのを見て全員静かに目を反らしていた。

一夏がアホな事を考えている理由は簡単だ。授業の合間の昼休み。全校生徒が集まる食堂。そして現在最も話題の男が連れだって二人朝の教室が優しく思えるほどの視線のビームにさらされていると言っただ。ストレスを感じもする。

一夏は目の前の生姜焼き定食（白米、ブタの生姜焼き、キャベツ

の千切り、豆腐と麩の味噌汁、沢庵）をつつきながら、ウンザリと溜息をついた。

「なんとかならねえかなあ。この視線……」

「ま、無理だろうな。なに、気にしなければいいのさ」

塚本は簡単に言つてのけながら、その大きな手でつかんだどんぶりを傾け中身を片づけ、綺麗に食いつくしたカツ丼定食（カツ丼、大根とえのきの味噌汁、きゅうりの浅漬け）を脇にどけると、次にポークカレーセット（ポークカレー、福神漬け、コーンサラダ）に手を付ける。見た目の巨軀に似合い、よく食べる男だ。

それが出来りや困らないって、と膨れる一夏をよそに、それまで黙って肉じゃが定食（白米、肉じゃが、ホウレンソウのおひたし、わかめと油揚げの味噌汁、千枚漬け）を口に運んでいた筈が塚本に話しかける。

「塚本さんは、専用機をお持ちなんですか？」

専用機？ と首をかしげる一夏の事は無視して、塚本は筈と会話を続ける。

「専用機、というのとは少し違うな。登戸で開発している新機構が

あるんだが、今回オレが学園に入学するためにその実験機を預けられることになっているんだよ。細かい話になるから、専用機のようなものとして理解してもらって構わんが」

そう言つて水の入ったコップに手を伸ばす塚本の手首に、白いリストバンドがしてある事に篤は気付いた。もともと学園の制服が白い事と、長袖に隠れていたため見えなかったようだ。それだけならば大したことではないだろうが、装飾などとは無縁に見えるこの男が、そのような物を身につけている事に篤は僅かながら違和感を覚えた。

しかし、その違和感も次の一夏の一言で篤の頭から完全に消え去る。

「なあ、専用機ってなんだ？」

こいつは。

篤は再会した幼馴染の知識の無さにあきれてしまふ自分を止められなかった。最初の授業の事は言うまでもなし、休み時間の「代表候補生とは何か？」という発言に引き続き、今のこの質問。こいつは学園に何をしに来ているのか。

教室でもやたらとうるたえる様子が目に付いたし、塚本さん程とは言わないが、もう少しどっしりと構える事は出来んのか。惚れた男には厳しいたちのようだ。

「専用機ってのは、あー。そもそも、だ」

塚本はカレーの最後の一口を呑み込み、サラダの小鉢を手取る。

「ISってのは、意志があると言われる。ISに、というよりは、要であるコアに、だがな。で、その意志が搭乗者の癖やなんかを理解する事で、ISは搭乗者に最適化しようとする」

小鉢を口に運び、中身をがさがさと流し込みもごごと咀嚼する。

「触れ合う時間が長くなればなるほどに理解が深まるのは人もISも同じことで、ずっと同じISに乗ってれば搭乗者がその機体に慣れて操作技術が上達するのと同じく、そのIS自体も搭乗者に慣れて反応速度やセンサー感度やらが向上する。だから、モント・グロツソの国家代表なんかは出場と機体が決まれば、最低でも200時間の慣らしを行い、少しでも長く乗っていようとする訳だ」

テーブルに置いてある水差しからよく冷えた水を自分のコップに注ぎ足し、一息に飲み干す。

「そうやって搭乗者に慣れていき、その、あー、シンクロ率？　でも言うようなんならかの要素を充分に満たしたISは、セカンドシフトって進化を起こす。これが起こる条件はよく判っていないが、

搭乗時間が長くなれば確率が上がる、のではないかとされている。今までに報告されているのは、アメリカの“キャプテン・オブ”ブルーファルコン、“スマイリー”ヘヴンズキャット、イギリスだと“オーバー・ザ・ライトニング”スターライトニング、ロシアの“火剣”フレイフェンサー、ドイツは“太陽墜とし”ルーデル・スツーカーカ。有名どころはこんなものだが、全体で37件の報告がある」

一夏は本当に判っているのか、納得顔で肯いているが、筈は一つ気になる点があった。

「暮桜は含まれないのですか？ 有名と言えば、あれ以上のISは無いと思いますが」

「暮桜って千冬姉えの……」

「ああ、暮桜な」

塚本はてきばきと空いた皿を重ねながら話を続ける。

「まあモント・グロッソで単一仕様能力を使っているのが確認されている以上、セカンドシフトしているのは間違いないだろうとは言われている。が、『セカンドシフト済みである』という報告が無い。報告が無い以上、公式にはセカンドシフトをしていない事になっている。詭弁だな」

塚本の言葉に、箒は納得するところがあつた。暮桜は彼女の姉の作であり、メンテナンスも一手に引き受けたと言っていた気がする。あの姉が、いちいち正式な報告義務などこなす訳が無い。

「で、えー、そうそう、専用機の話だったな。つまり、ISってのは『同じ人間が、同じ機体に』乗り続けることで期待できる能力の上昇値が大きいということだ。専用機ってのは個人に一機のISを預け、その機体のみを使わせることで機体や兵装の稼働率の最適化、及びセカンドシフトと単一仕様能力の発現を期待する制度だ」

塚本の説明に一夏はうんうんと肯いていたが、そのまま流れるように指を一本立ててもう一言。

「単一仕様能力ってのは？」

「そのくらい自分で調べろたわけ!!」

「うおっ!?! な、なんだよ箒？」

いい加減あきれ返った箒は「フンッ」と一つ鼻を鳴らし、食べ終わった食器を持って席を立つと、塚本に小さく一礼して踵を返した。

「なんなんだ？ 筭の奴……」

「ま、少しは自分で調べる癖はつけた方がいいが」

塚本は苦笑して説明を続ける。

「単一仕様能力つてのは、セカンドシフトした機体の内、一部が覚醒するISコアに由来する特殊機構だ。さっき挙げた五機に織斑教諭の“刃金の乙女” 暮桜、中国の“ザ・ドラゴン” 虎龍、イスラエルの“マグナムキッド” スパイク・キッド、イタリアの“ベレッタの恋人” アリエテ？、フランスの“つらぬきの騎士” レッド・ミラージュ、スウェーデンの“雷光” ヴィッゲン・ドラッケン、あー、と、これで全部か。以上の11機が使える。他にもいるかも知れんが、公式には発表されていない。早く食わないと時間無くなるぞ」

一夏は慌てて白米をかき込み、ぐびりと呑み込んで質問を続ける。

「特殊機能つて、どんなのなんだ？」

一夏の当然ともいえる質問に、塚本は小さく肩を竦める。

「さてな。暮桜の物はエネルギーの奪取、ないし離散だと言われて

いるが、他の機体に関しては詳しく明かされていない。まあ各国のIS機関にとっては虎の子だ。そうそうつまびらかにはしないさ」

そう言つて塚本は壁に架けられた時計に目をやり、ポケットから端末を取り出しそちらでも時間を確認すると、積み上げられた食器を手に立ちあがった。

「もういくのか？」

一夏は目で「俺をここ（視線のビームのど真ん中）に一人にしな
いでくれ！」と訴えつつ聞くが、塚本は「ああ」とこともなげに頷
き、くるりと背を向ける。焦る一夏に顔だけで振り向き。「お前も
遅刻しないようにな」とだけ言つて食堂を出て行った。一夏のトレ
イにはまだ半分ほどが残っている。

戦の時間だ。女たちの、仁義無き戦いが始まる。

休み時間の終了間際、騒ぎの収まらない食堂は織斑千冬によって
物理的に制圧された。

一日の授業を終え、一夏は机に突っ伏しそうな体に鞭を打って復習に励んでいた。

この一日で、一夏は自分の能力の不足を嫌と言うほど味わっていた。周りの女生徒達は誰一人として授業に遅れる様子は無く、自分と同じ立場であるはずの塚本義時もまた何不自由なく理解しているようであった。クラス31人中、自分だけが落ちこぼれようとしている。一夏は、それを何もせずに受け入れられるほど“負け”ではなかった。

それに一週間後にはあの腹の立つ金髪との勝負もある。ここが教育機関である以上、私闘など認められることはあり得ない筈であったが、しかしここは同時にIS学園であった。建前さえ、「ISによる模擬戦闘演習」としてしまえば私闘も決闘も思いのままだ。本来、決闘であれば挑まれた側が内容を決めるのだろうが

相

手の得意分野で戦ってやるのも、ハンデの一つとしてちょうどいい。一夏はそう考えていた。

教室の前側の扉から、ショートカットの眼鏡がひょこりと顔を覗かせた。

「ああ織斑君。よかった、まだ教室にいたんですね」

自分の板書したノート（黒板の内容を丸写ししただけ）を教科書を使って解読していた一夏は、今日だけでずいぶん聞いた声に思わず「判りません」と返しそうになりながら顔をあげた。

「……何か用ですか？ 山田先生」

「ええ、寮の部屋が決まったのでその鍵を……と、塚本さんはどうしました？ いらないみたいですけど……」

そう言って教室を見渡す山田真耶に、一夏ははて？ と首をかしげた。寮？ 確か一週間は自宅から通うて聞いてたんだけど。

「義時なら……あれ？ さっきまではいたんだけど……」

一夏が復習している間に出て行ったのか、教室に塚本の姿は無か

った。もう帰ったのか？　と思うが、よく見ると塚本の机の横にやたらがつしりしたグレーの大きめの鞆が掛けられている。どうやらまだ学園内にはいるようだ。と、噂をすればなんとやらと言つか、織斑千冬が塚本を引き連れて教室に入ってきた。

「あ、織斑先生。塚本さんも」

「山田先生、鍵はもう？」

「いえ、これからです。塚本さんの姿も見えなかったのです」

教員二人の事務的なやり取りを脇目に、一夏は塚本に話しかけた。

「どこ行つてたんだ？　というか、何時の間に」

「ん、ああ。ちょっと電話だ」

「お前たち」

二人の会話を遮って、織斑千冬が声をかける。山田真耶がそれぞれに「はい」と鍵を手渡した。

「今日から寮に入って貰う。鍵は今渡した一つだけだ。それぞれのルームメイトも同じ物を持っている。あとは私がマスターキーの持っているから、無くしたら届け出る。食事は寮の食堂で、朝は六時から七時半、夜は六時半から九時までだ。洗濯物は水曜と土曜の夕方五時から九時までに寮ののクリーニング室に持っていけ。翌日の五時には受け取れる。風呂は大浴場があるが、お前たちは使えん。各部屋にシャワーも付いているから、それを使え」

一息に説明する姉に、一夏は普段と同じつもりで返す。

「使えないってなんでだよ千冬姉え。俺でっかい風呂とか好きなんだけど」

振り下ろされる出席簿。

「織斑先生だ。それと貴様、まさか女生徒と一緒に風呂に入るつもりか？」

ぶち抜かれた頭を抱えつつ、一夏は千冬の言葉に自分が如何にかつだったかを思い知った。そう言えばここはいままで女子しかいなかった学園で、その学園の寮なのだから当然寮生は全員女子で、その寮の風呂なのだから当然男湯なんてものは無く、そこに入ろうと思えば当然混浴になる。よく考えるまでもない。何故気付かなかった。

「ええ！ お、織斑君、女の子と一緒に風呂に入りたいんですか！？」

一夏が反省していると、トチ狂った事を言い出す眼鏡が一人。

「ち、違います！ 別に入りたくありません！」

「ええ！！ じ、じゃあ女の子に興味ないってことですか！？ だ、だめですよ織斑君！ そ、そんな男の子同士だなんて！」

思春期特有の潔癖感から、思わず強く否定した一夏に、顔を真っ赤にした眼鏡が予想の斜め上を伸身ムーンサルトで飛んでいく。同性愛という言葉は知っていても、その実態についてはまるで知識の無い一夏はあまりの展開に開いた口がふさがらない思いだった。

しかし、教室の反応は一夏以上に凄まじかった。山田真耶のちょっと嬉しそうな「男の子同士だなんて」発言に、教室に残っていた女生徒の半分以上がぴたりと体を硬直させた。身じろぎどころか瞬き一つしない彼女たちに、若干顔を赤くするくらいだった新鮮な女生徒が疑惑の目を向ける。そんな中、窓際の席のある女生徒が小さく「ウホッ」つつぶやいた。

そんなことは知らない一夏は話題の転換を図り、何かネタは無いかとあたりを見回す。その中で、塚本に渡された鍵についたタグの

数字が目に入った。自分の鍵のタグを確認する。

「あの、ちf、織斑先生」

山田真耶の頬をつねり上げていた織斑千冬が、その手は離さずに返事をする。

「なんだ」

「ギブ！ ギブです織斑せんせ！ のびちゃう！」

「俺と義時の部屋、別の部屋みたいなんですけど」

「ああ、そつだな」

「痛い！ 痛いですって！ ご、ごめんなさい私が悪かったのです！」

「いや、さつき、ルームメイトって……」

「そつだ。それぞれ別の女子と同室になる」

教室の見えないボルテージが急上昇した。山田真耶の半泣きの「もう許して〜！」など誰も聞いていない。誰もが自分の鍵の番号を確認し、話している二人に近い者はなんとか一夏の手元を覗きこもうと体を伸ばした。塚本のそれを確かめようと言う猛者は現れなかったが。

しかし、一夏にとってはそれどころではなかった。さっきは混浴になるからと大浴場の使用を禁止しておいて、これは矛盾しているのではないか。もし着替え中にうっかり乱入してしまったらどうするのか。いままでだってどんなに気を付けていてもふとした事故で生着替えを目撃する等日常茶飯事だったのだ。これからないと言えるだろうか、いや、言えない。一夏は自分が今まで遭遇したハプニングの数々を思い出した。千冬の機嫌が急下降した。山田真耶が「ひぎい！！？」と鳴いた。

「……えっと、荷物の用意もあるので、帰っていいですか？」

「私が、直々に用意してやった。着替えと携帯の充電器があれば充分だろう」

「（バッドステータス：死人に口無しを得ました）」

「えっと、流石にそれだけじゃあ……」

「なんだ。何か不満があるか？」

「（返事が無い。ただの屍のようだ）」

しっかりと姉に調教されている一夏は、ここで千冬の機嫌が非常に悪い事に気付いた。これ以上引き下がるのは危険と判断し、ありません、とつぶやき肩を落とす。そこで、黙って聞いていた塚本が口を開いた。

「自分の荷物はどうなっていますか？」

相変わらず機嫌の悪い千冬だったが、弟の相手をする時と違い教員としての顔を思い出したのか、山田真耶を放り出し塚本に向き直る。

「登戸研究所から段ボールが三つ届いている。既に運び込んであるから、直接部屋で確認しろ」

「……了解しました。ああそれと」

「なんだ」

「ISについてですが、なんとか一週間後には間に合わせるそうです。ただし、恐らく午後になるだろう、と」

織斑千冬は淡々と頷き、「判った」と一言返した。

「では朝の時間に織斑とオルコットの対戦を行い、放課後にその勝者と塚本の対戦を行うとする。何か質問はあるか？」

塚本の「ありません」という返事を聞き、一夏が「ああ」と肯いたのを確認した千冬は「連絡は以上だ。遅くなる前に寮に向かえ」と二人に声をかけると、未だ伸びたままの山田真耶を引きずって教室から出て行った。

m <
e <
b 3
o ,
i I
l t
e e
r a
t
s
t
h
e
r
i
c
e
o
f
t
h
e
s
a

3 / It eats the rice of the same boiler

サブタイトルは「同じ釜の飯を食う」をエキサイト翻訳。ボイラーに思わず笑ってしまったので採用しました。

で、作中でのISに関してですが。

すみません魔が差しましたm(――)m。

あれです。厨二病です。全ては厨二病が悪いんです。クツ、沈まれ俺の右腕！

何この二つ名。ださつとか言われそうですが、消しませんし消せません。げにどし難きは厨二病です。悔しい、でもっ！！ビクンビクン折角なので元ネタなどを以下で説明。読まなくても困りません。

アメリカ ブルーファルコン

元ネタはF 16ファイティングファルコン、及びF-ZEROのキャプテンファルコンの愛機ブルーファルコン。

二つ名は同じくキャプテンファルコンより。

アメリカ ヘヴンズキャット

元ネタはF4F ワイルドキャット、F6Fヘルキャット等、キヤット系。

二つ名は猫 チェシャ猫 ニヤニヤ顔 笑顔。メリーゲート？ 関係ないですごめんなさい。あ、でも搭乗者は巨乳かも。

イギリス スターライトニング

元ネタはイングリッシュ・エレクトリック ライトニング。これに何か付け足そうとしたときにふと頭に湧いた「スターライトニング」の名前。多分なのは的な意味で聞き覚えがあったんでしょ。

二つ名は適當。

ロシア フレイフェンサー

元ネタはSu-24フェンサー。

二つ名はフェンサー（剣闘士）から。

ドイツ ルーデル・スツーカー

元ネタは最早説明不要のあの方。知らない方は「ハンス・ウルリッヒ・ルーデル」で検索すると判ります。現実がチート。

二つ名は「太陽くらい落とせそう」という作者の偏見。

日本 暮桜

二つ名は適當。

中国 虎龍

元ネタはあえて言うならブルース・リー。あの黄色に黒のラインのタイツが虎を連想させたから。鈴の機体も甲“龍”だし。

二つ名はブルース・リーより。

イスラエル スパイク・キッド

元ネタはイスラエル IMI ジェリコ941 アニメ「カウボーイビバップ」で感じでカウボーイビバップ主人公スパイクより。

二つ名は同じくIMIのデザートイーグルがマグナム弾運用銃として有名だったことから。

イタリア アリエテ？

元ネタはRe・2001アリエテ？、及びRe・2002アリエテ？より。

二つ名は見た目も美しい事で有名なイタリアのBeretta M92から。

フランス レッド・ミラージユ

元ネタはダッソー社のミラーズシリーズ、及びFSSのレッド・ミラージユ。フランス語の「赤」を使うべきかとも思いましたが、発音が判らないのでそのまま使用。ダッソー社はラファールの開発元でもあります。

二つ名はデモンズソウルのボスキャラより。関連性は特にありませんが、FSSのレッド・ミラージユがまさに騎士、という外観のため採用。

スウェーデン ヴィッゲン・ドラッケン

元ネタはサーブ37ビゲン、及びサーブ35ドラッケン。ビゲン、ドラッケンはそれぞれスウェーデン語で稲妻、竜の意味。

二つ名はそれぞれの語の意味から。

4 From the New World・(前書き)

一日の終わり。

4 / From the New World .

IS学園の寮は学年別である五階建ての生徒用居住棟三つと、三階建ての教員用居住棟、食堂・大浴場・クリーニング施設・購買部・医療室が収められている中心棟の五つの建物からなり、それらがそれぞれ渡り廊下で連結されてる。各生徒用居住棟は一階には玄関ロビー、各部屋のポスト、寮長となる教員の宿直室、最大百名まで同時に使用できる談話室、それに隣接する給湯室、その他ボイラー室などで埋められている。二階から五階までが生徒の部屋だ。各棟はそれぞれ桜棟、椿棟、堇棟と名付けられており、一度決まった部屋は三年間変わる事は無い。今年度の新入生は、桜棟に入寮する事になっている。もちろん一夏と塚本も例外ではなく、一夏は鍵のタグにある一〇二五の数字に従い、各部屋のドアに書かれた部屋番号を辿って自室を目指していた。

一〇一一、一〇一二、と目で追いながら、一夏は一週間後の決闘の事を考えていた。

セシリア・オルコットはイギリスの国家代表候補生であり、しかも本人の言によればその中でもジュニア筆頭であり、学園の入試で唯一試験教官に土を付けたらしい。一夏も学園に入学する際に行われた簡単な模擬戦闘で勝利しているが、あの時は明らかに接待を受けていた。自ら気の利く男を自負する一夏は、当然その事に気づいていた。さらに、昼に塚本から聞かされた話によれば、ISは搭乗時間に比例して実力が伸びる、らしい。何か違う気もするが、少なくとも一夏はそう理解していた。一夏が幼いころ習っていた剣道でも、修める期間が長くなればそれだけである程度の実力は養える。流した汗と、費やした努力は、程度の差はあれど確かに身に付く。ISであろうとも、この法則から大きく外れる事は無いだろう。

つまり、あの金髪は強い。恐らくは、未だISに直接触れた事が二度しかない自分より。そして、その差はたかが一週間では毛程も埋まりはしないだろう。一夏は冷静に考えた。つまり、策が必要だ。実力差を覆し、あの傲慢な女に後悔させるための、起死回生の妙策が。一夏は自室である一〇二五室の扉に手を掛けながら思考を回していた。ともあれ、未だ自分は基本もろくに知らない。作戦も必要だけど、まずは基礎をなんとかしないと。あれ？

「開いてる……。そう言えば、ルームメイトがいるんだっけか。もう来てるのか？」

一夏は部屋に入ると、ぐるりと室内を見渡した。内装はまるでどこかのビジネスホテルのようで、入ってすぐ左手には洗面所と思しき扉。右手にキッチン。奥には壁に並んだ二つのベッド。ベッドの反対側の壁に机と本棚が二つずつ。取りあえず、目につく範囲に人影は無い。奥のベッドに鞆が置いてあるし、その近くの床には大きなキャリーバッグもある。部屋に鍵がかかっていなかった事を考えても、中にいると思うんだけど、と一夏は首をかしげる。

きよろきよろと顔を巡らせながら奥に進む一夏の耳に、ガチャリと物音が届く。何やら、まるでドアが開いたような……

「ん……同室の者か。挨拶が遅れたな。すまないが先にシャワーを使わせて貰っていた。私はしの、の、の……………」

髪をタオルで拭きながら出てきた篠ノ乃箒と、振り向いた一夏の視線が交わる。お互いに、驚愕に目を見開き、まじまじと相手を凝視している。

完全に停止した時間の中、一夏の思考が最初に動き始めた。ほらな、やっぱりこうなった。だから言ったのに。

諦観に溜息をついた一夏の顎を、箒の掌底が撃ち抜いた。

一夏が篠ノ乃箒にKOされていたちょうど同じ時間、塚本は鍵のタグと寮の一階にあった部屋案内表に従い四階の廊下を歩いていた。同時に、部屋割について考えながら。

普通に考えれば、年頃の男女を同じ部屋に押し込むなどあり得ない。自分も織斑もコウノトリを信じているような歳でもないのでおさらだ。にもかかわらず、織斑千冬の言葉によれば女生徒と同室。何故か？

（やはり、それで得する人間がいるから、だろうな。恐らくは女を使つて自陣に引き込もう、ということか）

では、誰が？ 誰でもだろう。発表はされていないが、現在世界中に男性適合者は何人かいるはずだ。発表されない為に統計は取れないが、自分たち二人だけだと信じるほど塚本は無邪気ではなかった。しかし、多くは無いだろうとも想像していた。それほどばこばこいるのなら、十年も未発見であつたとも考えにくい。

つまり、男性適合者は希少だ。既に所有している国家・組織も、予備として、或いは比較対象としてより多く手元に欲しいだろう。

（だがそうなれば当然妨害もある。この場合は同じ考えの組織と……織斑女史か。実の弟を無碍にはするまい。学園の教師という立場なら、そう言う手段にも抗しやすい）

部屋割が学園によって決定される以上、内部にいる織斑千冬は手が出しやすい。しかしそれでも塚本と同室にしなかったのは……

スケープゴート

（身代わり羊か……。或いは、交換条件にでもされたか。学園の教員とて、出身国には家族もいるだろうし、愛国心もあるだろうからな）

千冬としては弟は塚本と同室にしたかっただろう。学園は教職員もほとんど女性だ。周り一面異性という環境でのストレスには、数少ない同性との触れ合いは良く利くだろう。しかしそれが出来なかったとすると、誰が一夏と同室になるか。可能性が高いのは、今日塚本と一夏の近くに常にいた少女。

（篠ノ乃箒か。織斑千冬と篠ノ乃束の関係は有名だ。となると、他の連中よりはましと考えたか？）

そこまで考えるが、実際に確かめない事には推測の域を出ないし、確かめるすべもない。一夏と箒が同室であれば、この推測が“間違っている”確率は多少下がるだろうが “あっている”確率はそう変わらない。

それに、塚本としては一夏がどうなろうと構いはしなかった。何せ今日顔を会わせたばかりだ。時代に流されるその様は憐れと思えど、親身になれるほど感傷的にはなれない。

（問題はオレのルームメイトか。既に所属ははっきりしているのだが……気にする者などいないだろうな）

となれば、どこが来るか。男性適合者が欲しい国家など、いくらでも　いや、全てだろう。しかし、学園に意向を通すだけの力を持つとなると自然と絞れる。EU諸国か、米国か……米国とは、一応協力関係もあるのだが。

目的の部屋に辿りついた。部屋番号と鍵のタグを見比べ、間違えていない事を確認する。

（まあ、考えても仕方が無い。果たして、鬼が出るか蛇が出るか）

拳を握り、扉をノック。小声であつたが、返事があつた。中にいるようだ。

「失礼、一組の塚本だ。開けてもよろしいか？」

部屋の中からかすかに息を飲む気配がした。

部屋に入った塚本は、扉の前を動かず直立不動で休めの姿勢をとった。部屋を見渡せば、確かに奥の机の上に大小三つの段ボールが重ねてある。

確かにこの部屋で間違いない様だ、と塚本が内心で頷いていると、手前のベットに座っていた女子がおずおずと声をかけた。

「えっと、あの」

が、結局それだけ言って口を閉じる。青みがかった肩までの髪に、顔には眼鏡。クラスでは見なかったことから、別のクラスのような顔立ちを見るに、日本人。塚本の所属は日本だ。どうやら、他国のちよっかいを引けて、日本が塚本のルームメイトを勝ち取ったらしい。

おびえた様子を見せる少女だが、塚本は構わず話を始める。

「塚本義時だ。所属は日本国情報本部登戸研究所。そちらに行っても構わないか？」

びくびくとこちらを見上げてくる女生徒に、淡々と声をかける。本来女子寮としてあるここにとって、塚本は異物だ。それを理解しているからこそ、塚本は細かい事と言えど許可を求めた。

塚本から目を反らしたりやつぱり見上げたりと忙しない少女だったが、小さく頷いたのを確認した塚本は「ありがとう」と一言口にし、身体を固くする少女の脇を通って奥の机の段ボールに向かった。三つある段ボールを全て開け、中身を確認する。

一つ目にはケブラー繊維製のリュックサックと、新品の下着、靴下、シャツが七枚ずつ。ジャージが三着。タオルが十枚。二つ目の段ボールはマミー型シュラフを始めとした野営用装備と、各種糧食。

三つ目にはモバイルPCと特製の無線LAN、その他情報戦装備だった。

塚本は一つ頷くと、リュックサックに着替えとタオル、野戦装備を詰め始める。その手際は躊躇いなど一切なく、確かな慣れを感じさせた。そこに、黙って見ていた少女の声がかかる。

「あの」

塚本は振り返り、未だ怯えの色が濃いながらも、“勇気を振り絞りました”と顔に書いてある少女に向き合う。

「何か？、あー」

そこで名前も聞いてなかった事を思い出す。

「え、あ。更識、簪、です。それで、あの」

塚本の肩がピクリと動いた。

更識。

日本でこの名を名乗る家は一つしかない。あの家はたとえ兄弟であつても、本家を継ぐ者以外は名を変えさせるほどだ。かつて日本

の暗部を続べた最大の乱破の一族。

（当代の楯無には妹がいる、か。そしてその妹が日本の代表候補生
ジュニア筆頭だと……この娘がか）

内心で呟く塚本に、更識簪が言葉が続ける。

「あの。塚本、さんも、この部屋に……？」

「その事だが」

そう強く言っただけでもないが、簪はびくりと身をすくませる。

塚本はその様子に苦笑し、リュックサックを背負い、情報戦装備
の入った段ボールを抱える。

「寮近くの花壇の傍にキャンプを張ろうと思っている。あそこなら
蛇口があつたし、少し遠目になるが、この部屋から目視できる。そ
うだ、連絡先も教えておこう」

え、と目を丸くする簪をよそに、塚本は机の上にあつたペンとメ
モ用紙を手に取り個人用のメールアドレスを書き込み、糧食の中か
らチョコバーを三つ取りだしまとめて簪の机の上に置く。

では、と扉に向かう塚本を、簪は慌てて呼び止めた。

「ちよっ！と、待って、くだ……」

二秒で失速する簪だが、塚本は気にせず振り返る。焦りを浮かべた簪の表情は、先ほどまでと比べて恐怖が薄れているようだった。

「心配せずとも、日本を出奔する気は無い、と先方には伝えて欲しい」

簪の表情が驚愕に固まった。塚本は、政府がおのれの国外脱出を考慮していない事は判っていた。ルームメイトが有象無象の小娘ならともかく、更識の娘に身体を使わせて引き留めるほどの価値が自身にない事も理解している。恐らく、簪の役割も護衛か、監視か。それも考え、キャンプ地には監視カメラの範囲内であり、この部屋から可視圏に収まる場所を選んだ。

「夕食には食堂を利用するから、何かあればその時にでも。メールしてくれてもいい」

そのまま扉に手を掛ける塚本に、簪は何も言い返せなかった。

塚本は扉を開き、リュックサックと段ボールを足元に置くと簪へ

振り返る。音を立てて踵を揃え、敬礼。

「では。失礼」

結局ろくに話もできなかった簪は呆然と塚本を見送り……………今朝がた、政府側から塚本の監視を依頼される際、久しぶりに口をきいた姉のセリフを思い出した。

『気をつけなさい。塚本義時の後ろには、“あの男”がいるはずだから』

簪とて更識だ。姉が優秀すぎるが故に、あまり言う教育は受けてきていないが、それでもそのくらいは知っている。塚本義時が、世界で注目されている最大の理由。

“アジアで最も危険な男”。塚本はその直接の子飼いの一人である。一筋縄ではいかないとは思っていた。だが、それにしても。

「こんな、部屋から出て行くなんて…………」

どっしり。

塚本が出て行った扉に視線を向けたまま沈黙する。

どうしよう。

ここから見えるって言うてたし、監視は出来るかも知れない。

どうしよう。

でも別の場所で寝起きするなら、護衛なんて出来っこないし。

どうしよう。

それに私の専用機も開発ストップしちゃって、自分でやるなんて言うて引き取っちゃったけど、今考えてみたら難しいって言うか無理なんじゃないかって言うか。

どうしよう。

……………怒られるかな？

様子を見に来た布仏本音は、頭を抱えて唸るお嬢様に目を丸くすることになった。

<
<
4
'
F
r
o
m

t
h
e

N
e
w

W
o
r
l
d
.

4 / From the New World・(後書き)

サブタイトルはアントニン・ドヴォルザークの交響曲第9番ホ短調作品95『新世界より』の英題。

お待たせしてしまった割に短めですみません；。

ようやく少しでも最強物っぽいところを見せた主人公。早くセシリア戦に行きたいものです。

5 Satan's right hand・(前書き)

はいはい。カッコいいよ。

5 'S a t a n ' s r i g h t h a n d .

塚本は暗いテントの中でのっそりと身を起こした。シュラフから這い出し、テントから出てぐうと一つ背伸びをする。ばきばきごりごりと背骨と首を鳴らし、テントからタオルと石鹸を取り出すと花壇そばの水道の近くに行き、躊躇いもせず寝間着代わりのジャージを脱ぎだす。瞬く間に全裸になると、蛇口をひねり、頭から水を被り始めた。

水にぬれる塚本の身体は、それはもう見事なものだった。身長184?、体重97?。前後に分厚いみっちりとした大胸筋。八つに割れた腹筋に、隆々とした背筋。鉄のごとく固いだろうと見ただけで判る臀部。丸太と見紛うほど太いはちきれんばかりの大腿部と上腕。毛の処理はしていないのか、コーカソイドほどではないが見事に茂っていた。

ひとしきり水に濡れると、持ってきたタオルと石鹸でガシガシと全身をこする。年頃の、気難しい娘の多い場所だ。身体は清潔に保っておかねば、何を言われるか判ったものではない。中野にいたころと比べれば、毎日石鹸が使えて下着を代えれるなど贅沢にも程があるが。最後に固く絞ったタオルで水気をぬぐい、先ほど脱いだジャージを手に取り、全裸のままテントに戻る。新しい下着を取り出し、ジャージではなく制服に着替えると端末で時間を確認した。○五一七。女生徒に見られては騒ぎになるだろうと早めに起きたが、少々早かっただろうか。

テントの天井に釣られた電気ランプのスイッチを入れる。一通りの装備は適当な配置に収めてあるため、今更手を入れる必要はない。せめて日が昇るまで時間をつぶそうと、塚本は持ちこんだ家庭菜園

の本を手を取った。

寮の食堂も、学園の食堂に負けず劣らず巨大だ。メニュー数は若干少ないが、朝食と夕食でメニューが切り替わり、それぞれ時間にあつたものが頼めるようになってる。

塚本は大盛りにして貰った焼き魚定食（白米、アジの開き、焼き海苔、梅干し、鰹節と豆腐の味噌汁）を手窓際の空いた席に座ると、黙って手を合わせ食事を始める。食事を控えたがる女子生徒たちの中にあつて、ガタイに似会った量を食べる塚本は厨房勤めの女性たちに気に入られたらしく、その手の茶碗は実に盛りがいい。

黙々と白米を口に運ぶ塚本の前に、一人の女生徒が座る。青みがかった黒髪。手に持った扇子。首元のリボンの色は、二年を示している。顔にはうつつすらと微笑が浮かんでいる。美人である事も相まって、非常に目の保養になる、と言つには、いささかこわばりが見て取れた。

「初めまして。塚本義時さん。自己紹介は必要かしら？」

塚本の印象は、ずいぶんと警戒されているな、であつた。茶碗を置き、味噌汁を一口飲み口を開く。

「……更識楯無殿ですか。妹さんとよく似ていらっしゃる」

楯無は塚本のセリフにピクリともせず、初めから全く変わらない微笑で会話を続ける。

「聞きたい事があるのだけど」

「私に許される事ならば」

塚本は再び茶碗を手に取りながら返事をした。更識は名家であるし、目の前の少女はその当代であるが、所詮年下の少女だ。咎める風も見せない事だし、構うまいと食事を続ける。

「簪ちゃんは気に入らなかった？」

しかしこれには、流石の塚本も思わず箸を止めた。脳裏に、昨日そっそうに切り捨てた思考が飛来する。

“更識の娘に身体を使わせて引き留めるほどの価値が自身にない”。

いや、と塚本は頭を振った。同時に、昨日の夕食時、同年代らしいゆるい雰囲気少女と連れだって、こちらに話しかけようとして失敗していた簪の様子を思い出す。あの様子を見れば、彼女がそのような教育を受けていない事は判る。アレが演技だと言うなら、わざわざ更識の名を使わせることもないだろう。逆に「更識ならば」と警戒されかねない。

ならば楯無のセリフの意図は……。

「御不満でしたか」

「少しね。あんな可愛い子はどこにもいないでしょう?。」

「ならばなおの事、自分のような得体のしれない男と同室になっては不安でしょう」

そこで初めて、楯無は目を細めた。身体を前に倒し、肘をつき口元で手を組む。口から洩れる言葉も、一段温度が低くなる。

「あの手この手で、取り込みにかかると思ったものだから」

「間諜の真似事でもさせるつもりでしたか? 登戸を相手に?。」

「まさか」

手をほどき、ぐいと背を伸ばす。ぱたりと開かれた扇子には“無理ゲー”と書いてある。

「あの子に、いえ、今の更識に、そんな力はないわ。“あの男”と喧嘩だなんて、まだFBIと戦争していた方がましよ」

塚本はにやりと口を歪める。

「これは剛毅な。51のFBIを相手に戦争ですか」

「意地悪言わないでよ」

楯無はウンザリと溜息をついた。何時の間にか、張りつめていた空気が霧散している。閉じられる扇子が立てる音も、心なしか力が抜けていた。

「政府には私からも言っておくわ。……日本に徒なすつもりはないのでしょう?」

「そもそも私の行動にも政府の意図が入っているのですがね」

「一枚岩の組織なんて存在しないわ」

「ごもつともで」

楯無は立ち上がると、口の前でパタリと扇子を開く。“御機嫌よう”と書かれた扇子をひらりと動かし、背を向けた楯無に塚本の声がかかった。

「更識は最早文民です。多少耳がいいからと言って、むやみに首を挿むと痛い目に会つかもしれません」

ぴたりと足を止めた楯無は、二秒ほど立ち尽くした後、「そうかもしれないわね」と呟くとそのまま食堂の出口へ向かう。

「御自愛を」

返事はなかった。

「義時、頼む！ 俺にISのことを教えてくれ！」

一夏は食堂に来るや否や、塚本のところにまっしぐらに走ってきて手を合わせた。後ろには、機嫌の悪そうな筈もいる。

塚本はずずつ、と番茶をすすする。

「まずは飯にしたらどうだ。朝を抜くのはきついだろう」

「このままじゃ、俺はあいつに勝てない。だからって、何もせずにただ負けるのは嫌なんだ」

「聞けよ」

真剣な顔で見つめてくる一夏から、箒に視線を移す。

「どうせなら篠ノ乃に教えて貰ったらどうだ。幼馴染なんだろう？」

そう言う塚本に、箒は苦々しい顔で返す。

「実技に関しては私が教えます。ただ、座学となると私も完璧とは言い難く……」

「なるほど」

塚本はまた一口茶をすする。一夏の期待に輝く瞳に苦笑を投げる。

「まあ構わんよ。人に教えるのも復習になる」

「本当か！　ありがとな、義時！」

そこにジャージ姿の千冬が現れる。

「何時まで食べている！ 食事は迅速によく噛んですませろ！ 遅刻でもしてみる、グラウンド10周させるからな！」

まだ朝食を受け取ってすらいらない一夏と篤が目に見えて慌てだす。学園には陸上競技用の一周1キロのグラウンドと、IS操縦訓練用の一周5キロのグラウンドがある。一夏も篤も、ここで短い方で許されるなど考えるほど楽観的ではなかった。

「まあこの時間では無理だな。授業の合間じゃ時間が足りないだろうし、昼休みにでも」

「塚本！ 貴様は昼休みになったら生徒指導室に来い！ 話がある！」

空の湯呑を手に立ち上がり、昼の約束を取り付けようとした塚本だったが、千冬のハリのある声に遮られる。

二日目から千冬姉えに呼び出されるなんて何したんだ命知らずな、と目で語る一夏をよそに「判りました」と返事をする。

「っつーことだから悪いが放課後だな。じゃあオレは先に教室行ってるから、二人とも遅れないようにな」

返事もそぞろにカウンターへ走る一夏と篝をほおって食堂を出る塚本だった。

昼休み。生徒指導室を訪れた塚本を待っていたのは織斑千冬一人だった。生徒指導室はテーブルが一つと椅子が四つだけの簡素な部屋で、千冬は廊下側の椅子の一つに腰をおろしていた。失礼します、と声をかけて入ってきた塚本に対し、無言で顎をしゃくり、自身の目の前の椅子を示す。座れ、と言うことだろう。

テーブルを回り、真向かいに腰を下ろした塚本が疑問を投げるよ

り、織斑千冬が口を開く方が速かった。

「さて、説明して貰えるんだろうな」

「何をでしょうか」

舌打ちを一つ。

「……何故寮を出た。あんな場所にテントなど張って、何を考えている」

「部屋にいれるべきだ、という意見は出なかったのでは？」

千冬は思わず口を噤んだ。出なかったわけではない。しかし、大半の教員が塚本のテント暮らしに反対を唱えなかったのは事実だ。

「御心配なさらずとも、学園や弟さんに危害を加えるつもりはありません。同室になってしまった少女への気遣いが主なのですから」

嘘だ。

千冬は咄嗟にそう思った。危害を加えないと言うのは嘘ではなか

ろうし、同室の少女への気遣いもあるだろう。しかしそれが主ではあるまい。塚本の容姿は威圧感があり、並みの女生徒では萎縮してしまい、下手をすれば学園生活に支障をきたしかねない。だからと言って、たったそれだけの理由だとは思えなかった。

では何が理由か。千冬はそこが理解できなかった。教員たちが反對しなかった理由はおぼろげながら判っている。この男と、自分たちの教え子を同室にするのに嫌悪感があつたのだ。『もし、手籠めにでもされてしまったら』。謂れないこととは言え、心から否定するには塚本の容貌は獣に似過ぎた。ただ無表情でいるだけで、眈々と獲物に狙いを定める爬虫類に似た雰囲気がある。

女尊男卑に傾いた昨今では、強姦は極刑に処される事がほとんどだ。それを嫌つたと考えれば寮を出る理由にはなる。なるが、織斑千冬は、目の前の男にはそれ以上の隠された理由がある気がしてならなかった。そもそもこの男が、性欲一つ制御できないとは思えない。根拠はない。確信はある。この男は、自分より深いところにいる。

「反対が出なかったという事は、それで得をしようとする事です。私にとつても得ですし、織斑先生の損にならないという自負もあります。不満ですか？」

千冬の感が、塚本の言葉に偽りが無いと告げていた。だが同時に、全てでもないと訴えていた。肝心なところをぼかされている。なるほど塚本は千冬に損失を与える事はないだろう。自分から出て行った以上、それが容認されれば塚本にとつては利益だ。教員たちにとつても、生徒を守れば得と言え、待て。

「“得”とはなんだ。学園の教員が、貴様の野宿を認めて何を利する」

そうだ。生徒を守る事は義務だ。損得ではない。あえて言っても、損害の回避としか言えないだろう。そもそも塚本を女生徒と同室にしたのは学園だ。それが今になって別々に寝起きする事を是認する。何故か？　つまりそれが、塚本の言う“得”だ。

「正式に発表されたうちの“二人目”に、接触が容易になる、と言う“得”です」

それがつまりどういうことなのか、千冬は即座に理解する事が出来なかった。

「……教員であれば学園で貴様と接触する事は難しくないだろう。寮内の巡回のシフトもあるから、部屋を訪ねる事も容易い」

「教員が、ではありませんよ。織斑先生は、織斑一夏の部屋割に口を出したではありませんか？」

淡々と語る塚本に、千冬は思わずぐつと黙り込んだ。確かに、自分は弟の部屋割に關して干渉した。それはどこの馬の骨ともしれん小娘に手を出されるのが癪だったこともあるが、それ以上に情を使つた引き込みを警戒してのものだ。

「私が特定の女生徒と同室になれば、それ以外の生徒が近づきにくくなります。同室の権利を得た生徒も、トンビに油揚げをさらわれたくないでしょうから、妨害工作くらいはするでしょう。国家の意向を受けた教員にとって、私がフリーであると言つのは競争から締め出されない、という“得”になります」

千冬が息を飲む音が部屋に響いた。学園の教員が、生徒たちを導く聖職者が、国家の狗として動いている。塚本はそう言つたのだ。

そんなことはない、と声を大にして否定したい。しかし、納得している冷静な自分がある事を千冬は感じていた。千冬とて“ブリュンヒルデ”などと呼ばれ、世界の裏と言う物もそれなりに見てきている。その経験が言ふのだ。「それくらいのことなら、あるだろう」と。

「……だが、それがどうして貴様の得になる。同室の生徒は日本所屬だった。貴様も日本所屬だろう。他国からの接触を妨害してくれるなら、貴様の学園生活の充足にもつながるはずだ」

塚本の顔に、うつすらと笑みが浮かぶ。

「一枚岩の組織などありません。国家政府もまた然り」

この男は、どれだけのものを見ているのだろう。自分の知っている、それなりどころではない、もっと深度の深い情報を持っている事だけは、千冬似も判る、判るが、それだけだ。

実感する。させられる。自分など、腕っ節が少し強いだけのただの小娘だ。24の、酒の味を覚えたばかりの小娘にすぎない。

目の前の男が、自分より一つ年下だと理解しながら、千冬はそう思わずにはいらなかった。

5 'S a t a n ' s r i g h t h a n d . (後書き)

サブタイトルは「悪魔の右手」をエキサイト翻訳。デモンズを出したかったんだけどまあいいかなとそのまま使用。意味は静まれ、俺の右手よ！ 的な。今回厨二病的展開過ぎたかな、と思ったので；。

それにしても楯無さん、貴女どこから湧いて出たの？ ここで登場する予定なかったのに。勝手に出てきて勝手に帰りました。あれー？

この作品の織斑千冬は絶対無敵のパーフェクトウーマンではありません。原作通り家事はできませんし、包丁で指を切れば血が出ますし、転べば膝もすりむきます。酒にはそこそこ強いですが、「ビールは水」と豪語する本物の酒豪にはかないませんし、べろんべろんになれば壁に向かって話しかけます。

また、情報戦の技術はありません。もともと一般人ですし、ブリュンヒルデといってもいくなれば「オリンピックの金メダリスト」でしかありません。有名人ですが、それだけです。

「IS用実体刀振り回してたじゃん」と言われそうですが、現在、日本に実在する最大の日本刀としては全長465.5cm、刃渡り345.5cmの山口県下松市花岡八幡宮の「破邪の御太刀」が存在しますし、実際の合戦場で刃長170?の大太刀を使った者の記録も残っています。

これを考えれば、IS用実体刀も充分に鍛えていれば呼吸と歩法、体移動であつかう事は可能かと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9861u/>

IS×イリヤの空、UFOの夏

2011年10月9日02時46分発行